

書の教育活動に関する指導法の研究

——書道ワークショップ2010の実践を中心に——

森 哲 之*

A Study of Teaching Methods in Calligraphy Education:
Calligraphy Workshops 2010 in Practice

Tetsushi MORI*

はじめに

広島文教女子大学の教育活動を通じた地域貢献への取り組み「ソシオ活動」が3年間継続してきた。その間、初等教育学科ソシオ活動として、本学科書写書道専修は、地域の親子を対象とした「書道ワークショップ」を開催してきた。この流れを汲み、4年目となる本年度、初等教育学科では、国語、書写書道、図工の各専門領域が連携し、本学公開講座の一環として、リレー方式による講座を行うこととなった。そして、2010年11月13日に、書道教室「書道ワークショップ2010」を開催した。

本稿では、初等教育に関連する書写書道の教育活動とともに、書道ワークショップの実践内容について考察する。特に、文字を書く姿勢や筆記具の持ち方等について触れる。

1. 大学における書の教育活動と地域交流

書道ワークショップでは、初等教育学科の特色ある教育活動を生かし、芸術文化の特質、よさ、楽しさ、面白さ等に触れ、地域の方とともに文化的活動を行うことを趣旨としている。そこで、地域の子どもと保護者を対象とし、書の

文化や芸術に関する表現活動を行ってきた。

この企画運営については、学生の教育活動の一環としており、学生は制作や研究を進めながら、地域の方との交流を模索している。また、書写書道専修の教育研究活動を基盤に、学科の専門教育科目である教科教育学演習でその専門性を深め、教科教育に関する小学校国語科書写の学習内容、広く書の芸術表現等について検討している。そして、書の芸術環境を提供し、多種多様な書写書道のかたちに触れ、創作活動を楽しめるよう企画を立案実施し、書写書道教育のあり方を検証するものである。

開催に関する募集は、新聞各社の折り込みちらし「広島文教女子大学公開講座」案内と本学ホームページへの掲載による。その後、参加予定者には、当日の内容を伝える案内を郵送した。次に、書道ワークショップの実践内容について述べていく。

2. 書道ワークショップの実践

(資料：書道ワークショップ2010制作風景 参照)

(1) 書道ワークショップの概要

4回目となる「書道ワークショップ2010」は、本学公開講座「親子で参加！子どもの書道・国語・図工教室」中の「書道教室」で展開した。2010年11月13日、広島文教女子大学美術棟・125書道室において開催し、子ども18名、保護者

* 本学准教授

13名、計31名の参加があった。

書道ワークショップのテーマについては、学生アイデアを集約した。学生は自身の研究課題について、実践を通して検証する機会となる。そして、書写書道専修の特色ある教育活動を生かした企画としている。参加者が主体的に制作できるよう、書写、手紙、昔の文字、大筆書きの各種コーナーを設けた。また、共同制作として、大きな旗に参加者で寄せ書きを行った。

次に、本ワークショップの事前準備、全体の流れ、当日の内容等について述べていく。

(2) 企画と制作環境

地域の方と大学との交流拠点として、本学のギャラリーや専門教室を活用した。会場となる専門の書道室では、参加者が書の制作を自由に取り組むことができるよう環境を整備した。机上で制作するコーナーとともに、教室後方に制作場所を設け、いずれも大型の毛氈を敷き詰めている。教室の周囲や机上には、制作の手掛かりとなるよう学生による参考作品を展示し、参加者の制作への一助とした。各コーナーには、各種毛筆、墨、顔彩、硯、半紙、和紙、画仙紙等の書画の用具用材を配した。また、黑板には、ワークショップの内容を分かりやすく板書し紹介した。

当日の受付後には、作品鑑賞の機会として、美術棟ギャラリーを見学できるようにしておいた。ギャラリーには、教員と学生の作品等を展示し、芸術や書の世界への入り口とした。そして、参加者には、受付の際、色紙や色和紙、はがき等一式を手渡し、各コーナーで活用できるようにした。子どもには、手作りの名札を用意し、名前を書いてもらい、着衣に付けた。

(3) オープニング・デモンストレーション

オープニングは、学生による司会で進行した。

本ワークショップの趣旨、学生を中心に実演を交えた各コーナーの説明を行い、子どもたちを引き付けるデモンストレーションを適宜行った。その後、参加者は興味関心のあるコーナーを巡回し、様々な書の体験を行うことになる。

オープニングの中では、特に、書写の基本的な事項の確認として、文字を書く姿勢や筆記具の持ち方を、子どもに分かりやすく楽しみながら伝えることをねらいとした。

筆記具の持ち方については、毛筆を手渡し、まずは、親指と人差し指の先で挟んでみることで、そして、そこに中指を添えるよう促した。別の観点からは、箸の持ち方ができる子どもに、その上部の箸の持ち方を目安とさせた。学生が持ち方のコツを示しながら自然な握りを確認した。

次に、書写のための準備運動や動機付けとして、加えて、学生と子ども達が楽しく触れ合うきっかけとなるよう、スポーツにおける準備体操を参考として、指や手、身体を動かす書写体操を試みた。子どもがよく知るキャラクターの曲に合わせて、各自筆を手に持ち、書写における基本点画の筆運びをイメージしたウォーミングアップを行った。全身での筆の運動は、書写指導における空書きにも通じる。子どもと保護者に好評であった。

文字を書く姿勢については、図解とともに、実際に学生が筆記具を持ち、文字を書く体勢を客観的に見てもらうことにより示した。背中、足、手や腕の状態のポイントを、対話を持ちながら考えていった。

(4) 各コーナーの特徴

〔書写コーナー〕

小学校の書写学習を展開するコーナーとした。事前に、子どもが楽しめるよう、キャラクター等に隠し文字や基本点画の輪郭を盛り込み、

筆でなぞりながら学習できるワークシートの開発を行った。また、漢字に興味関心を持ちながら、書写に取り組んでもらえるよう、文字の成り立ちをクイズ形式にしたパネルを作成した。同時に書写学習の参考となる教材とした。

子どもにも保護者にも楽しみながら学んでもらえた。各種ワークシートは効果的であり、子どもたちが進んで取り組む姿が見られた。そして、子どもが課題とする内容に応じて、一緒に書くなどの支援を行ない、対話を持ち解決していくようにした。

また、参考作品を活用し、好きな文字や言葉、名前などを和紙に書くなど、子どもが主体的に取り組むことができる書写学習とした。

〔手紙コーナー〕

手紙コーナーでは、親子で毛筆を用いて心の込めた手紙が書けるようにした。固型の墨を磨り書くことができるようにし、また、顔彩を用い色彩豊かに取り組むことができるようにした。制作の契機や参考となるよう学生による絵手紙など多様な作品を例示しておいた。

感謝の気持ちをテーマとし、子どもから親への手紙、そして親子で楽しむ手紙のやりとりを想定した。相手のことを思いながら心を込めて書く提案をした。手書きの書は温かく、その人らしさがにじみでて、気持ちが伝わる。子どもたちは、主に家族宛てに感謝の手紙を楽しみながら書いていた。子どもたちと一緒に、保護者も取り組んでいた。手書きの書を活用したコミュニケーションと豊かな心の育成について検討するものであった。

〔昔の文字コーナー〕

昔の文字コーナーでは、学生が制作等で取り組み深めてきた古典の書等から、様々な書体のユニークな文字を紹介し、毛筆で挑戦するものであった。デザインとして面白い文字、装飾的

な文字に触れることにより、豊かな書の表現に目を向けさせた。

〔仙人といっしょに大筆書きコーナー〕

大筆に親しみ、体全体を使って書く楽しさを体感することをねらいとした。全紙2枚を継いだ画仙紙（136×136 cm）に、大筆で一文字を書く。大筆の寸法は、筆毛23、径6、毛先幅20、全長63 cm程である。子どもの身体より大きな文字を、全身で書くことを通して生き生きとした書を実感していくものであった。

オープニング時の説明では、学生、教員による大きな書のデモンストレーションを行った。子どもも大人も、全身で書く姿に大変興味を持って見ていた。学生による筆仙人の仮装は、子どもたちに好評であった。布で作った衣装を身に纏い筆仙人に扮した学生が、大きな紙から登場した。伸びやかに、勢いを持ち、全身で大胆に表現した。

実際の制作場面では、構想を練り半紙に下書きの後、子どもも大人も勢いよく大筆を揮った。親子一緒に筆を持ち書く姿も見られた。大筆で書くことを通して家族間のコミュニケーションもできたようである。

（5）共同制作・エンディング

〔共同制作：大きな旗づくり〕

共同制作では、大きな旗（136×272 cm）に、感謝の気持ちをテーマとして、参加者全員で思い思いに寄せ書きし、一つの作品を協同して制作した。全紙4枚を繋げ合わせた大きな紙（136×272 cm）に柄を付け旗とし、事前に用意しておいた。各コーナーでの多様な表現方法を生かしながら、様々な文字やことばを自由に表現した。各々に書き進めつつ、他者の書いたものを受けて工夫を凝らす様子も見られた。ここでも、それぞれの主張が見られ、子ども同士の

関わり合いによる表現の相乗効果があった。

〔エンディング〕

エンディングにおいては、学生より、できあがった共同制作の旗の紹介を行った。また、ワークショップの振り返りをしながら、子どもたちに感想を発表してもらった。楽しかったことなどを子どもたちは答えてくれた。最後に、気に入った自身の作品を持ち寄り、記念撮影を行った。

(6) 参加者の感想

参加者から感想が寄せられた。以下に主なものを抜粋する。

- ・書く活動を様々なコーナーで興味深く取り入れられてどのコーナーも楽しめました。大筆を楽しみにして参りましたが、書くことより、人との心をつなぐ手紙コーナーにも興味を抱いていたように思います。本日参加のお子様方も、一番興味をもって取り組まれていたように感じました。昔文字や書写は少し理解が難しい面もありましたが教材の準備等関心しました。小学校中～高学年対象に是非取り入れていただき活用していきたいと思います。
- ・大筆コーナー、ダイナミックに自由に筆を運ぶ経験ができました。手紙コーナー、色を使って文字を書いたり、絵を書いたりするのも楽しかった様子です。
- ・どのコーナーも楽しく活動することができました。各コーナーを自由に体験できたのが良かったです。大きな筆、大きな紙で書くことは普段では体験できないことなので良かったです。
- ・墨のかすれ、濃さ、つけたしなど、初めて体験して自分で納得のいくまで筆を使う経験ができました。

- ・3才の娘がとってもののびのび楽しそうに字を覚えてかいていました。楽しく書道ができたようで興味を持ったように思います。ほめてもらえたのがうれしかったようです。
- ・スタンプの存在も子供にはよかったみたいです。親が「よい」「おわり」「よごれる」といった感覚も子供に押しつけずに本人のセンスで作らせてみると、子供も親も、気持ちがい感覚になり、見守るということで、どちらも満足感を得られたのではないかと思います。
- ・とてもきめ細かく対応して頂いて、子供達も喜んで楽しく過ごすことができました。
- ・子どもによく分かるように丁寧にやさしく教えて下さりました。
- ・接しやすいのと、教え方も上手だと思います。
- ・やさしく、お温かくお声をかけて頂き、ありがとうございます。
- ・一緒に書いてくれたり、ほめて下さったりと、良かったと思います。
- ・筆の持ち方、とめ、はねなどをお姉さんに教えて頂き、身に付いたので、良かったです。
- ・学生のみなさん積極性を感じました。教育に大切な共感したり、個々のよさを認めることを身につけておられるように感じました。筆たいそうでは子どもたちの右手に合わせ学生さんは左手を使われており細部にまでの心づかいに関心しました。これからの活動、ご活躍に期待いたします。頑張ってください。

3. 書道ワークショップの成果と課題

今回の公開講座における「書道ワークショップ2010」では、地域の親子に、初等教育学科の書の教育研究に基づく企画を通じて、多様な書の芸術文化に触れてもらうことができた。

学生にとって、事前の計画から事後のまとめまで一連の企画運営とともに、地域の親子と触れ合う機会は、貴重な経験となり大きな発見があった。また、学生それぞれの研究課題について、ワークショップによる実践を通して、小学校の現場等での指導に応用していくための検証を行えた。学生一人一人にとって、将来を見据えた活動となるものであった。

4. 姿勢と筆記具の持ち方に関して

ワークショップにおける基本的な考えとして、書写書道の学びとともに、楽しむ観点を重視してきた。ここで、テーマの一つとしていた、姿勢と筆記具の持ち方について触れておく。

姿勢や持ち方など一種の型のような事柄は、容易に身に付くものではなく、一朝一夕には解決しない。指導者が書写における基礎を的確に認識した上で、文字を書く楽しさを感じさせながら、例えば箸の持ち方を覚えることと同様に繰り返し継続した支援が必要である。

筆記具の中でも、特に鉛筆の持ち方について、振り返っておく。幼児や小学校低学年の場合、無理のない筆圧で書くことが肝要であろう。指や手に負担が掛からないよう、力まず柔らかに書くことのできる濃さの鉛筆が望ましい。一般には、濃く強く書くことが強調されることが多く、特に子どもの指等への負荷に懸念がある。

また、小学校書写では3年生から毛筆による学習があるが、毛筆書写の自然で適度な持ち方の感触等を、様々な筆記具使用において応用することができる。毛筆による書写学習では、毛筆使用上の程よい緊張感等があり、自ずと背筋を伸ばすなど姿勢をよくする特性もある。そして、例えば右払いの点画のように、毛筆特有の筆圧の変化など点画の動きについて理解を深められる。そこでは決して強く握ることはなく、

適度な強さの持ち方が保持されるのである。このように、毛筆書写の技法等からは、よい姿勢や、持ち方における自然な筆圧の加減を学習することに意義が見いだせ、硬筆による書写学習に生かしていけるのである。

そこで、子どもの身体の成長、目の健康、小さな手や指を痛めないような配慮を考えたときに、身体に余計な負荷が掛からないようにすることが重要である。子どもは、多くの文字に触れ、多くの文字を書くことが日常にある。成長するに従って、その量も増加しよう。文字を書く姿勢において、身体が曲がった状態や伏した状態が持続したまま学習が行われれば、身体への負荷や影響は想像に難くない。

おわりに

今回の書道ワークショップでは、小学校国語科書写に関する学習内容ははじめ、豊かな書の体験を通して、書の特質を再確認していった。書の芸術文化への関心が高まり、自由な制作を行う中で、それぞれに喜びや発見があったようである。

各自が作品に創意工夫を凝らし、参加者の活動に相互作用が数多く見受けられた。ワークショップとしての大きな成果であろう。親子、子ども同士、地域の方同士が双方向に学び合う機会であり、豊かな創造活動となった。大学と地域の方との書を通じた関わりに大きな収穫があった。

また、文字を書く姿勢や筆記具の持ち方、基本点画のワークシートなどについては、楽しみながら学ぶ方法を検討できた。

参考文献

全国大学書写書道教育学会編『明解 書写教育』萱原書房（2009）

資料：書道ワークショップ2010制作風景



